

シンポジウム 足軽屋敷と辻番所 そして芹橋地区の未来と彦根

江戸時代、彦根城の外堀と芹川に挟まれた芹橋地区には、彦根藩最大の足軽組織「善利（せり）組」の組屋敷が約700戸ありましたが、現在は30戸ほどに減っています。見張り小屋「辻番所」を備えた足軽屋敷も売却されることとなったため、地元の「芹橋足軽クラブ」とNPO彦根景観フォーラムが買収・保存しようと市民有志によびかけ、「彦根古民家再生トラスト」を結成、1000万円を目指して寄付金を募り、現在までに約550万円を集めています。

シンポジウムは、この足軽屋敷の保存とまちづくりを考えようとトラストなどが初めて実施したもので、平成20年3月15日、彦根市芹橋2丁目の現地一帯で開かれ、市民ら約80人が参加しました。

第1部では、辻番所前で、彦根市教委の谷口徹さんが、足軽の組織や役割、かつて足軽が交替で辻番所の小窓から通りを監視していたことなどを説明。参加者は、足軽屋敷や辻番所の内部を見学した後、目板塀と門とで構成される町なみと城下町特有の「どんつき」や「くいちがい」が残る町割りを散策しました。



第2部は、四番町スクエアのホールで、濱崎一志・滋賀県立大教授が辻番所や主屋の構造、柱や床下の状態や耐震補強の必要性などを解説。辻番所は腐食や度重なる車の衝突で早急な修復が必要であり、足軽屋敷も白アリ被害があり補強が必要と判断しました。

ついで、トラスト理事長の山崎一眞・滋賀大教授が、辻番所・足軽屋敷を「足軽 commons」として活用する構想を提案しました。これは、①地元の人たちが自分



たちの共有空間として活用しつつ、②彦根を訪れる来訪者に地元の歴史を伝え体感する場を提供し、交流を図る、③点在する本物の足軽屋敷をめぐる「歩く足軽博物館」の核施設としても機能させ、④彦根城→キャスルロード→四番町スクエア→足軽組屋敷地区→



芹川けやき並木の new 散策路の形成につなげるものです。これについて、地元の市川さんが「地域に住む生活者の視点が抜けていないか」と質問、山崎教授は「4月から住民のみなさんと話し合うワークショップを設けたい」と答えました。

第3部は、「芹橋地区の未来を考える」というテーマで、青木 仁（ひとし）東京電力技術開発研究所主席研究員が講演しました。青木さんは、「日本型街づくりへの転換（ミニ戸建・細路地の復権）（学芸出版社、2007）などの著書があり、芹橋のような狭い路地を拡張してクルマが自在に入れる広い道路をつくる近代的まちづくりが、景観保全上も都市経営上も行き詰まっていると指摘しました。



そして、持続可能な都市経営の視点から、脱クルマのまちづくり、すなわち人が歩くことを基本とする細路地のシステムを再評価すべきだとされ、いくつかの事例を示されました。

また、防災上の最大課題である地震での倒壊と火災の延焼の危険についても、狭い道路が被害を拡大させるとして道路拡張や都市改造に結びつけるのは誤りで、個々の建物の耐震性と耐火性の向上こそが課題であるとされました。

意見交換では、芹橋足軽倶楽部の会員で芹橋地区の自治会長でもある渡辺さんが、足軽屋敷の保全にむけた地域での取り組みを紹介され、市議会議員の有馬さん、細江さんが彦根市で新設された「文化財保護基金」の活用の可能性について報告されました。



昨年6月末に設置された彦根市の「彦根城の世界遺産登録を推進する方策を考える懇話会」は、2月28日に昨年度最終の会合を開きました。そこで、これまでの4回のあらましを報告します。

● 世界遺産への「価値の主張」と遺産の特徴

彦根城とその城下町は、日本の長い城郭発達史の最盛期に造られ、その後の幕藩体制250年余の平和な時代を維持した、近世を代表する完成された城郭都市であると定義できます。

この歴史文化遺産の第一の特徴は、日本の城と城下町の典型的な姿をよく伝えていること。城は天守や櫓など日本を代表する城郭構造物で構成され、城下町は計画的に造られ、城郭都市特有の「どんつき」「くいちがい」などの町割りを良好に残しています。また、足軽屋敷・町人職人街・仏壇街・宿場などの豊富な遺構を残しています。

第二の特徴は、江戸時代の大名文化の精華を明瞭に伝えていること。防衛に工夫した城郭建築、書院・能舞台・茶室・庭園などによる御殿建築、武器武具・能面・能装束・茶道具・歴史資料などの動産を豊富に収蔵しています。

● 大名文化の華ひらく近世城郭都市

彦根城は世界遺産暫定リストに記載されており、世界遺産登録に向けての準備状況を示す報告書を昨年12月、文化庁に提出しました。報告書のタイトルは「彦根城と城下町—大名文化の華ひらく近世城郭都市」。城郭だけでなく城下町なども広く世界遺産の構成資産（コア・ゾーン）に含めています。これには、懇話会での意見を反映したもので、彦根城や佐和山城跡のほか、旧魚屋町や善利組足軽組屋敷、花しょうぶ通り商店街、七曲がり仏壇街といった城下町、高宮や鳥居本とい

った中山道の宿場町など21ヶ所を構成資産として挙げ、うち9カ所は、将来的に重文指定や伝統的建造物群保存地区の選定を目指して整備する方針としています。

● 「城と城下町」を基本に

今後の取組としては、「城と城下町」を基本とし、準備状況報告書をもとに構成資産の調査や彦根城の普遍的価値の証明に取り組むとともに、滋賀県知事が表明した「琵琶湖」、松本市長が提唱する「国宝4城」による世界遺産登録も選択肢の一つとすることになりました。

